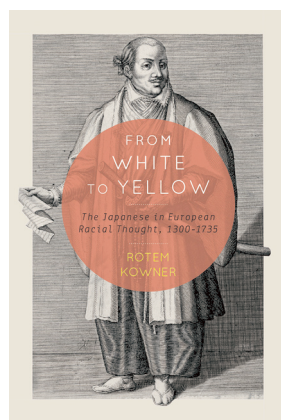


ロテム・コーナー

『白から黄へ——ヨーロッパの人種観にみる日本人
1300—1735年』Rotem Kowner, *From White to Yellow: The Japanese in European Racial Thought, 1300-1735*

光平有希

McGill-Queen's University Press,
2014

本書は、現生人類を骨格・皮膚・毛髪などの形質的特徴によって分ける「人種」という概念がまだ存在しなかった十四世紀から十八世紀前半において、ヨーロッパ人が日本人をどのように捉え、どのような眼差しをもつて見ていたのか、その変遷過程を辿る著作である。

イスラエルのハイファ大学で教鞭を執る本書の筆者ロテム・コーナー氏 (Rotem Kowner, 1960-) は、これまで主として近代日本をテーマとして議論を展開してきた日本学研究者である。その研究と並行して、彼は現代における人種差別とその発達の歴史研究にも長年取り組んでおり、両研究視座の集合形として完成した本書は、中世から現代に至る日本人とヨーロッパ人との邂逅とそこから始まる交流の変遷を追う、二巻本プロジェクトの先駆け第一巻に位置する著作である。

本書は「想像」の段階、「観察」の段階、「再検討」の段階という三つの部で構成され、上記三部は日欧交流史上の各段階を指し示している。まず第一部「想像」の段階では、一三〇〇年から日本へ鉄砲が伝来する一五四三年までの間に、早くも「黄金の国」ジパングに憧れを抱いた商人兼冒険家のマルコ・ポーロ (Marco Polo, 1254-1324) や、その憧れを実践に移し大航海時代の嚆矢となつた探検家クリストファー・コロンブス (Christopher Columbus, 1451-1506) 等の記述に焦点が当てられる。彼らの著述からは、「ジパング」及び「ジパング族」出現への憧憬、さらには日本文化について先駆的かつ高潔と捉える西洋人たちの眼差しがうかがえ、そこからコーナー氏は、当時のヨーロッパ人における現代人種科学認識や人種観の不在を読み解いている。

続く第二部「観察」の段階では、一五四三年から日本が鎖国期に入る一六四〇年までの時期が取り上げられている。日本で布教活動を行ったイエズス会士のフランシスコ・ザビエル (Francisco Xavier, ca. 1506-1552) や、ルイス・フロイス (Luís Frois, 1532-1597) 等の記述を基にしたコーナー氏の分析によると、同時代ヨーロッパ人の記述からは、日本人に対する一貫した生物学的、分類学的視点からの枠組みや認識ははまだ特定することができないという。

それに対して、コーナー氏は一六四〇年から一七三五年の時期を扱う第三部「再検討」の段階で、ヨーロッパ人の日本人に対する見方に大きな変化が生じたと論じている。変化の契機を同時代ヨーロッパにおける植物学、医学、科学的思想の勃興に帰した上で、コーナー氏は東インド会社の外科医エンゲルベルト・ケンペル (Engelbert Kaempfer, 1651-1716) による日本関係記述がヨーロッパにもたらした影響や、植物学者カール・フォン・リンネ (Carl von Linné, 1707-1778) が一七三五年に著し、人種体系を追究した『自然の体系 (Systema naturae)』に強い眼差しを向ける。そして各記述の分析を通じ、同時代ヨーロッパで東アジアに対する黄色人種観が形作られ、日本人を含む黄色人種への軽視傾向が加速する様相を描き、さらに上記の三段階における全体像として、日本人が「白」から「黄」へと至る道筋を示していくのである。

さて、本書でコーナー氏は、近世・近代ヨーロッパにおける人

種観の変遷を調査することにより、日本を含む東アジア人全般へ向けられた黄色人種への西洋側の視点を提示する。と同時に、本書では一般的な人種観に対しても光が当てられており、それゆえ人種観を包括し、なおかつ形成を導く人的外観や風習についての個別的言及が数多く列挙されている。これら豊富な情報量を含む研究の中で、ややないものねだりの読了後の感を記すならば、「表象」としての個別的言及から共通部分を抜き出して得た黄色人種の「概念」に対する著者の語りにさらに深く傾聴したいという思いを禁じえなかつた。しかしながら、これに関しては、著者が今後刊行される第二巻の研究成果を併せた議論で言及してくださることをお願いしたく思う。

以上、これまで紹介してきたように、本書は文献学的観点から極めて詳細にテキスト分析された重要な著作である。また、様々な社会的メカニズムを通して、人種の区別がどのように認識されていたのかを実証的に分析する本書の内容は、歴史研究書という枠組みを越えて、現代の我々が直面する人種観を介在した多くの問題をどのように捉え、立ち向かえば良いのか、その視座を与えるものでもある。さらに、生物学的に文化を分断するのではなく、より文化風俗的な側面から各地域に住む人間を区別していた「人種」誕生前に生きた人々の視点から学ぶ意義についても、本書は読者に対して大いに語ってくれるであろう。